

観光文化

Tourism & Culture

VOL.

182

2007 March

財団法人日本交通公社

特集◎ 次世代継承

◆巻頭言

不退の心—お水取りの危機救う 水野正好……①

◆特集

● 歴史的景観・町並みの継承—真の先進国となるために 岡崎篤行……②

● 「おわら」の保存振興と次世代継承 三橋重昭……⑦

● 長浜の次世代継承はイベントで実現
—メンバーを増やし、リーダーを育てる 北川 賀寿男……⑪

● 次世代へつなぐところ—伝統文化の継承を考える 栗田香穂……⑮

◆視点

● 日中韓三カ国の観光研究機関会議の開催 岩佐吉郎……⑲

◆連載

I あの町この町 第20回

大利根のほとり — 千葉県・銚子市 池内 紀……⑳

II 岩倉使節団に嵌まって30年 第5回

国内の歴史ツアーと国際交流パーティー 泉 三郎……㉒

III ホスピタリティの手触り 41

ひとり歩きを始めたスシ 山口由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



— 風車の里・南房総丸山 —

享保十三年（一七二八）、八代將軍吉宗がインド産の白牛を放牧したことから日本の酪農発祥地といわれる丸山町（現在は南房総市）は、房総半島の南端部に位置する。太平洋にも面し、温暖な気候に恵まれた緑豊かな田園風景の広がる農業を中心とした地である。

だが、基幹産業の農業が後継者難に直面。十数年前には農業一点集中から民間活力導入によるバランスのとれた産業構成の町づくりへと方向転換した。就労の場の確保、若者の地域定着、快適な生活環境の整備を打ち出し、その実現のために町の知名度・イメージアップ、住民が郷土を愛する心を持つことを目的に「風車とローズマリーの里」の景観行政に取り組み、実現させた。

ヨーロッパの庭園様式を取り入れたローズマリー公園は、観光客の人気を集めるまでに成功。今では、町のシンボルとなった三五基の風車も菜の花とマッチし、みごとなハーモニーを醸し出す。その風景は美しかったのもしい。

大和はいま静寂、強まる寒気の中、春日野の鹿も人とともに白い息をはく。その中、またれてきた東大寺のお水取りが始まった。天平勝宝四年（七五二）四月、娘の孝謙天皇に導かれ聖武上皇と光明皇太后は念願の大仏開眼式に臨まれる。まさに日本に仏教が伝わって以来の大盛儀である。この少し前の二月、大仏建立を授けてきた良弁上人の弟子、実忠和尚は法華堂の北に二月堂をつくり、十一面観音を祀りお水取りの行事を始める。思わしくない聖武の体調の恢復、人々の除災を十一面観音に懺悔することで果たそうという想いで始まったこの「修二会」の儀式は、一年として途絶えることなく今日まで伝えられた。読まれる神名帳や過去帳、音高い走りと五体投地。燃え盛る竈松明の炎と光、華麗の一語につぎる達陀松明の加持跳躍、神祕の若狭井のお水取り。それぞれが人の心に訴え身体にしみる激しい行である。

一二五六年つづく長い長いこのお水取り行事にも中絶を思わせる事態は何度かあった。一一八〇年、平重衡が南都を襲撃し大仏殿など主要建物は焼失。年中行事全てが廃絶・中絶の憂き目にあう中、幸い焼け残った二月堂で同心十一人が「哀しきかな不退の行法断絶の期来る、たとひ後年に修するも更に何の甲斐あらん、若し寺、本に復せば後、悔いなむ」と立ち上り実修。この「不退」

不退の心 — お水取りの危機救う

奈良大学名誉教授

水野 正好

の信念は以後長く寺に息づくことになった。三好・松永の兵火で大仏殿などを焼失した翌一五六八年もお水取りは行われている。最近の危機は昭和十九年、お水取りの最中に練行衆十一人の中の三人、援助の人々にも召集令状が来るという前代未聞の事態。八人掛け持ちで辛うじて事態を収束したと筒井寛秀師は記す。敗戦の虚脱感とともに大きな危機だった。

こうした一二五六年間の修二会の行事は東大寺のいろいろな記録の中に記されているだけでなく、『二月堂修中練行衆日記』などに連年、参加練行衆の名や人数が書き継がれて今日に至っている。昭和二十一年の記録者は筒井寛秀師。記録はこの昭和二十一年までの二九三冊が重要文化財となり、連年の長い伝統、不退の心を伝える。書き継がれる記録もまた「不退」の心そのものである。時には参詣の人が極めて少ない年が相次ぐ時代も、行事は万民の願いをこめて実施されつづけた。今日の「変化・改革」の声、参加者数を問う社会とは全くの別世界。人のために永世不変、宗教者として時勢におもねない不革護持のつよい「不退」の心が大きく輝く、それがお水取りの行事である。今春一二五六年、不退の行法に相まみえる幸せは何ものにもかえがたい私の抛りどころである。

(みずの まさよし)

次世代継承

高齢化や人口減少などの影響が特に大きい地方では、その経済的な基盤が脅かされ、困難に直面している。地域の活力低下をいかに克服し、地域固有の文化をどのように伝え、活用していくのか。そのキーワードは「継承」。今号は、歴史的景観・町並み、伝統文化、地域の組織・人といった視点から「継承」を考える。

特集 1

歴史的景観・町並みの継承

—— 真の先進国となるために

新潟大学工学部建設学科 助教
新潟まち遺産の会 副代表

岡崎 篤行

歴史的景観・町並みを継承する意義

二〇〇四年の景観法制定に見られるように、近年、景観の重要性が認識されるようになってきた。しかし、歴史的町並みを中心とする歴史的景観の保全は、既に一九六〇年代から取り組まれてきた。これは、歴史的町並みにおいては、景観の目標像が明確で、住民の合意形成も比較的容易であったことによる。また、ディスカバー・ジャパンのように、日本固有の文化としての重要性が、国民に支

持されたことも背景にある。

景観における歴史的町並みの意義を考える場合、歴史的町並みには「文化」がある点が重要である。逆に、短期的、表層的な景観整備に文化は希薄である。日本固有、そして地域固有の歴史的町並みは、生物の種と同様、一度失われれば二度と取り戻すことはできない。従って、その保全・継承は、景観整備のなかでも、最優先されなければならない。

歴史的景観に関する制度は、徐々に発展してきた。その経緯を理解するには、二つ

の重要な視点がある。第一は目的の変遷である。当初は、「史料的价值」に重点を置いた「文化財保護」が主体であったが、その後は、「資源的価値」に重心を移しつつある。静態保存から動態保存へ、あるいは保存から活用への移行ともいえる。そのなかでも、観光等による「地域経済活性化」や、地域間競争に勝つための「地域アイデンティティ確立」は、外部志向の目的といえる。一方、内部志向の目的もある。地域の絆や誇りの醸成といった「コミュニティ活性化」や、

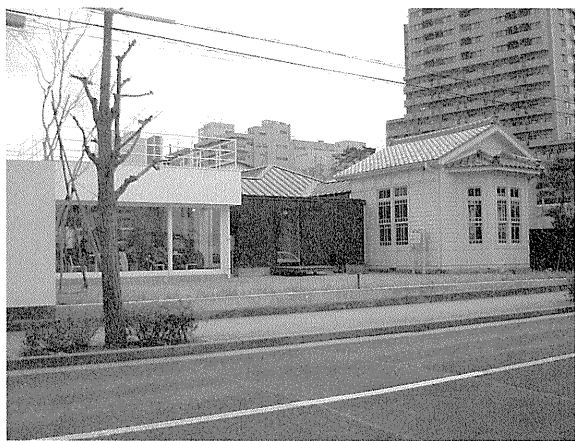


写真1：レストランに再生された旧副知事公舎



写真2：ボストン・バックベイ（アメリカ）の町並み保存地区

景観形成、住環境の整備といった「アメニティ向上」がこれに相当する。近年では、環境負荷の軽減や省資源といった「持続可能性の向上」という意義も認識されている。

第二の視点は市民の役割である。古都保存法の制定、文化財保護法改正による伝統的建造物群保存地区制度の設立、景観法の制定などは、いずれも先進的な市民や自治体の取り組みを背景に、国が制度化したものである。制度が整備されるにつれ、以前のような「開発する行政」対「守る住民」と

いう対立軸ではなく、行政と住民との協働が注目されるようになっていく。とはいえ、制度が未整備な部分や、地域によっては遅れた行政というものが必ず残るので、反対運動の必要性は消えないだろう。ただ、単発的な抵抗から進んで、政策提言としての戦略的運動が求められよう。新潟市では財政難で取り壊しが懸念された旧副知事公舎（大正十年築）に関し、まちづくり戦略の観点から複数の市民団体が連携して活用案を提言し、実現をみている（写真1）。

先進諸国との比較

でわかる日本の位置づけ

当然ながら、日本だけを見ていては、日本のことはわからない。例えば、日本は国家としての歴史は長いが、歴史的建造物の保全状況をみると、先進諸国に比べて圧倒的に少ない。国が保全措置を講じている建造物の人口一人当たりの数は、日本をひとした場合、アメリカが一〇、イギリスは二〇〇というようなかたちである。国家の歴史は浅く、開発志向のイメージが強いアメリカにでさえ、大きな差をあげられているのだが、その事実をほとんどの日本人は知らない（写真2）。なぜ、そうなったのか。戦災の影響はあるだろう。よく言われる文化の違いも要因の一部である可能性を完全には否定できないかもしれない。しかし、そのような言説は言い訳にしか聞こえない。最大の要因は、保全の制度が大きく遅れていることにあると思われる。これは、日本が戦後の経済発展のためにフロー重視、すなわち新築重視の都市・住宅政策を取ってきたことによる。世界遺産条約への加盟が、一二五番目であったことも象徴的である。つまり、国民

の意志の問題なのである。成熟国家となり、ストック重視への移行が共通認識となった今日、歴史的景観保全のための制度充実が急務である。これは、経済面のみでなく文化面でも豊かな、国際社会で尊敬される真の先進国になるのに不可欠である。我々は、もっと視野を広げなければならない。

次に、現在の日本における歴史的景観・町並みを取り巻く問題を四つに分けて整理し、解決策を考えてみたい。

量的問題

先述のように、日本で保全されている歴史的建造物は圧倒的に少ない。これは、価値が非常に高いもののみ、文化財指定という手法で厳選主義的に保全してきたことによる。先進諸国と比較した場合、日本では第一に町並み、すなわち地区保全が遅れている。つまり「点」の保全のみでなく、「面」の保全をもっと充実させなければならない。現行の国による重要伝統的建造物群保存地区の選定のみでなく、都道府県選定や、一定の地区内の歴史的建造物を一括で登録する制度などによって、裾野を広げることが可能になる。

また、地方に多数存在する、残存率がそ

れほど高くなくても、地域の特色を残した町並みの保全が必要である。例えば、新潟は近世初期に建設された湊町で、特に下町しもまちと呼ばれる地域には、歴史を感じさせる町並みが残っているが、面的保全の措置はまったく取られていないし、全国的にもまったく知られていない(写真3)。さらには、狭い範囲に高い残存率で残っている町並みだけでなく、例えば京都中心部のような大都市、中都市の歴史的市街地の全体的保全へと視野を広げなければならない。これは、文化財としての町並み保存から、都市計画としての都市保全への展開であり、都市観光の振興からも重要であろう。

第二に、指定文化財より緩やかな登録文化財の取り組みが遅れている。アメリカより三〇年遅れたものの、日本でも一九九六年に有形登録文化財制度が導入され、順調に実績を伸ばし、五〇〇〇件を超えた。ただし、アメリカでは州や自治体レベルで、国よりさらに多数の建造物を登録しているのに対し、日本で登録制度を整備している自治体は、ほぼ皆無である。この点の改善が求められる。登録制度によって、多数の歴史的建造物を保全する手法は、「点」でも



写真3：新潟市下町（しもまち）の町並み

「面」でもなく、「網」として保全する新たな手法なのである。

質的問題

町並み保存のベテラン地区でも、昭和の建築に江戸時代の意匠を復元するという、疑問を抱かざるを得ない手法が取られている場合がある。また、道路拡幅で歴史的町並みを取り壊したあとに、伝統「風」の町並みを再現するといったことも行われている(写真4・5)。これらは、世界遺産の選



写真4：道路幅で新しく造られた彦根の町並み

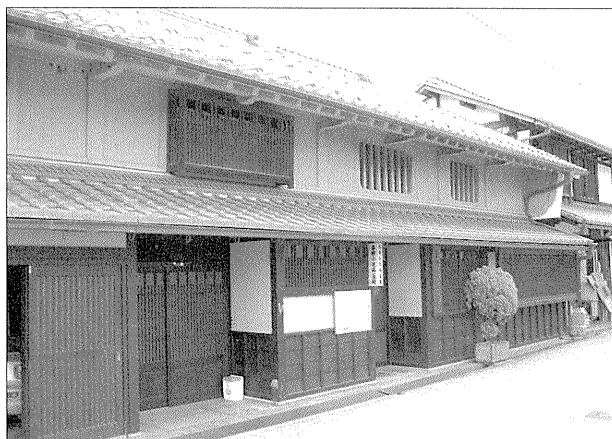


写真5：彦根の伝統的町家



写真6：進化し続ける飛騨古川の町並み

定でも重視されている「オーセンティシティ（真正性、本物であること）」への理解に欠ける行為といわざるを得ない。また、保全と継承という文脈で用いられる場合の「継承」は、柔軟でよいように聞こえるが、都合よく利用されれば、やはり「風」のレベルに陥ってしまう。飛騨古川では、戦前の町家は多くないものの、戦後に建てられた町家が、徐々に進化しつつ普及し、個性と調和が両立した町並みが、現在でも拡大

しつつある。しかし、それも昭和三十年代以来の蓄積と、数多くの施主・大工の切磋琢磨があつて、初めて成立しているものであり、日本では非常に稀なケースである（写真6）。この問題を解決するには、国民全体のデザイン能力向上が必要である。そのためには、デザイン審査等を公開の場で行う等、広く市民を巻き込んでいく取り組みが必要である。新潟市では、昨年から景観条例に基づく大規模建築行為等の協議内容をイン

ターネットで公開している。また、現在、行政で歴史的町並みや景観を担当する職員はほとんどが、専門教育を受けていない状況も改善を要する。例えば、少なくとも都道府県や政令市に、専門教育を受けた文化財建造物や景観の担当者置くことを義務づけるなどが考えられる。

制度的問題

日本の都市計画は、過去のストックを無



写真7：城下町村上の町並み

視し、発展し続けることを前提に構築された。このため、歴史的町並みの保全是、特例措置として扱わざるを得なかった。都市計画の制度全体を、人口減少時代に合わせ、既存環境を前提としたシステムに改めなければならぬ。特に、開発への期待を背景に過大に設定された容積率は、安定した住環境の維持や地区固有の景観形成の阻害要因となっている。また、必要以上の防火系

地域も、歴史的ストックの維持・活用を困難にしている。さらに、都市計画道路による歴史的町並みのこれ以上の破壊も避けなければならぬ(写真7)。

いくら景観上の規制をかけても、根本の都市計画が高度成長期の発想のままでは、本質的解決には至らない。とりあえずの緊急避難措置として、全国で最高高さを制限する高度地区の指定が相次いでいるが、次の段階としては、実態に合った適度な容積率へのダウンゾーニングが不可欠であろう。また、一部の自治体で実施されているように、都市計画道路の必要度を見直し、かつ、良好な既存景観や文化の破壊を防ぐよう配慮する必要がある。以前は、補償金で家を建て替えることを目的に路線を引いたというような話もあるが、本来、あつてはならないことである。

主体的問題

狭い範囲の町並み保全とは異なり、今後の都市全体を視野に入れた景観保全では、文化財と景観は不可分である。観光部局も切り離せないだろう。しかし現実には、国でも自治体でも、歴史的町並みは文化財行

政、景観は建設行政というように縦割りとなり、十分な連携が図られていない。一部の自治体でみられるように、文化財と景観を一体的に扱う部署の設置を進める必要がある。

一方、民間にあつては、各地で町並み保存団体が活躍してきており、近年では、本格的な事業展開を行うNPOもみられるようになった。しかし、これら個別の団体を束ね、支援する全国的組織や、自治体範囲での連盟組織が、欧米に比べて弱体である。こういった中間組織の活動が、民間非営利セクター全体の発展には不可欠である。理想的には、アメリカのように民間の全国組織が州レベルの組織を支援し、さらに州レベルの組織が市町村レベルの組織を支援するというようなヒエラルキーが形成されるとよいだろう。しかし、日本の現状を考えると、国や自治体が、全国的組織や自治体範囲の組織形成を支援することが必要なのかもしれない。全国町並み保存連盟、日本民家再生リサイクル協会、日本ナシヨナルトラストといった全国組織同士の連携も考えるべきと思う。

(おかげさあ あつゆき)

「おわら」の保存振興と次世代継承

NPO法人まちづくり協会 理事長

三橋 重昭

「おわら風の盆」の歴史

立春から数えて二一〇日目、毎年九月初めの三日間、老若男女が揃いのはっぴや浴衣姿に編み笠をつけ、三味線や胡弓の音にあわせ、唄い踊り、町中を流し歩く行事、それが「おわら風の盆」である。

元禄時代から始まったといわれているが、最初は歌舞、音曲をともなつた無礼講の賑わいで、全盛を極めたのは江戸末期から明治の初めまでであった。明治七年頃には、変装をして昼夜町内を騒ぎ回るのは風俗壊乱だとして、警察から差し止められたという。

それが洗練されて現在のような三味線、胡弓、太鼓が奏でる哀調の旋律と唄、そして優雅で粋な踊りになっていったのは、昭和初期の地元文化愛好家によるおわら談義から。加えて地元医師で初代「おわら保存

会」会長川崎順二氏の「おわら」に対する見識と情熱、そしてそれに引き付けられて八尾にやってきた幅広い芸能文化人との交流の輪からだという。

一例として、若柳吉三郎の踊りの振付、歌人吉井勇等の新作詩、画家の小杉放庵、林秋路の絵画等だが、それらが「おわら風の盆」を芸術的なレベルまで高めた。そして八尾の風土や人々の中に溶け込んで大切に引き継がれている。

「おわら風の盆」が広く知れわたつたのは、昭和五十一年放送のNHK『新日本紀行』、昭和五十五年放送のNHK銀河テレビ小説『風の盆』。さらには作家高橋治の小説『風の盆恋歌』（昭和六十年出版）、歌手石川さゆりの『風の盆恋歌』（平成元年）などによるものであろう。

ただ、有名になるにつれて九月初めの三

日間に観光客が集中することの問題と相まって、「おわら」を支える地域共同体の空洞化が目立ってきたときに、「おわら」にも次世代継承という危機が訪れていた。次世代継承のために今取り組まれていることが、通年型の文化観光資源化の方向だ。

「おわら」を支える八尾の町

「おわら風の盆」の舞台は八尾町。富山平野から飛驒の山脈に入る街道筋にある人口約二・二万人の町だが、平成十七年四月に平成の大合併で富山市となり、現在は富山市八尾町。

八尾町は、昭和二十八年の昭和の大合併で八尾ほか九つの地区が合併しているが、その中心は一〇の町で構成された坂の上の旧八尾地区。一〇の町とは現在、合計で人口約二八〇〇人（九五〇世帯）の東新町、西



高台に位置する旧八尾町（東京大学都市デザイン研究室撮影）

八尾一〇町があるわけだが、坂の町八尾の美しさの一つである。

旧八尾一〇町の面積は約一〇ヘクタール。ここに八尾の歴史、伝統、文化、石段の坂や路地、町会、おわら保存会、曳山保存会、濃厚な近所付き合い、そして美しい自然と一体となった土蔵づくりや格子戸のある町並みが凝縮されている。美しい町並みの一つ諏訪町通りは、「日本の道百選」に選ばれている。

新町、諏訪町、上新町、鏡町、東町、西町、今町、下新町、天満町。
旧八尾一〇町は、下流で神通川と合流する井田川に沿った高台の町。井田川沿いに幾重にも高く積まれた石の壁、その上に旧

それぞれの町に「おわら保存会」がある。なお、八尾町には八尾町人の繁栄と心意気を今に伝える豪華な絵巻物、「八尾曳山」も有名であるが、この曳山は六町の「曳山保存会」で守られている。



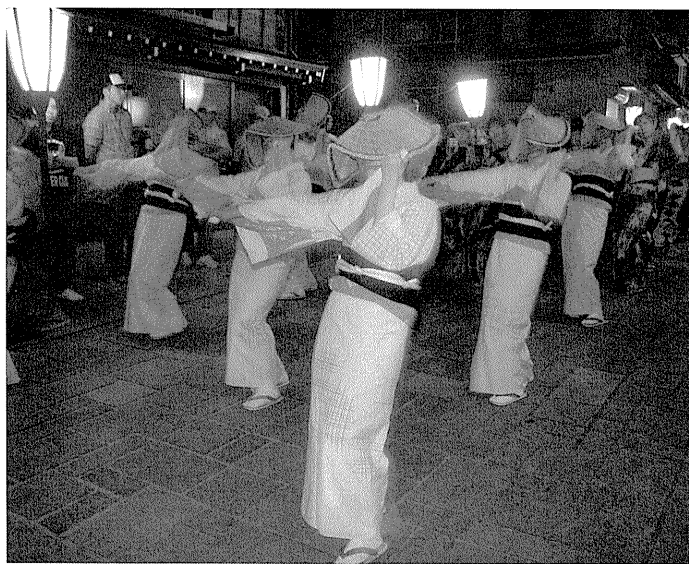
地方役にまわり、三味線を奏でる

「おわら風の盆」の次世代継承のメカニズム

「おわら」は元禄時代の町建てから始まった。「おわら」の起源や「風の盆」の発祥は諸説あるが、いずれにせよ「おわら風の盆」は自然・風土・産業、地域の人々によって育まれ継承されてきた八尾町の伝統行事。地域共同体としての宗教上の背景、生活習慣、それらによって八尾に生れた人々は生れたときから「おわら」とともに生きてきた。



豊年踊りで練り歩く小学生



優雅で粋な新踊り（東京大学都市デザイン研究室撮影）

「おわら風の盆」の踊りは十一町ごとの中学生、高校生、大学生そして青年団が中心になっているが、この町の子供たちは二、三歳で自然に踊りが身に付いてくるといふ。青年団を卒業すると踊りから地方役じかたにまわり、「唄い手」となったり、「囃子」、「三味線」、「胡弓」、「太鼓」等の楽器を奏でる。小学生までは伝統的な「豊年踊り」で基礎を

覚え、中学生になると昭和の初めに創作された「新踊り」を、そして高校生ぐらいになると子供の頃から懂れていた「おわら風の盆」の衣装を着て優雅で粋な「新踊り」の主役になる。

この不文律のようになっていく年齢的段階制も次世代継承の仕組みの一つともいえる。「おわら風の盆」は地域共同体としての伝

統行事ではあるが、明治の初めに警察から差し止められたということは次世代継承の危機に直面したことになる。

明治時代後期に「おわら節」に初めて胡弓が取り入れられ、大正に入って「越中おわら節」がレコード化されたものの、踊りは「豊年踊り」だけ、ということから、これらの伝統行事を洗練された文化の粋に高めようとする創作活動が始まった。結果、完成したのが現在の「新踊り」であり、マスコミ等で紹介され広く知られるようになった。

「おわら風の盆」は、地域共同体の中の保存会が中心となっている。

ただ、地域共同体の産業的基盤が衰退し、町を取りまく環境はモータリゼーションとともに「ファスト風土」（日本中の地方のロードサイドに大型商業施設等が出店し、本来固有の歴史と自然を持つていた地方の風土がまるでファストフードによる

に全国一律均質なものになってきていること）化し、人口の減少・高齢化によって、また他者の流入によって地域共同体意識が希薄化すると、「おわら」を支える保存会自体の存続も危うくなる。

このような時代になって、おわらの次世代継承が大きな課題となった。

平成八年に越中八尾観光協会会長、翌年には「富山県民謡おわら保存会」会長に就任した福島順二氏は、「おわら風の盆」という観光資源を「まちづくり」に生かすことを考えた。地元ではもともと、「おわら」は自分たちが楽しむためのものであって、八尾の文化そのものであり、見せ物ではないという自負心があった。

じつは、この自負心が踊りや演奏の技量の向上を妨げていることにもつながっていた。そのような状況を憂えていた福島氏は、「おわら風の盆」について、踊りを見せること、そして喝采を浴びること、それが技能の向上と伝統文化の保存育成の糧となるのだと考えていた。

「保存会」の理解を得て、観光会館で月二回「おわら風の盆」の本物の雰囲気を感じとってもらえるイベント「風の盆ステージ」

の開催にこぎつけたのは平成十年のことだった。

風の盆ステージは、団体客からの要望に応えて実施する「おわら鑑賞」や「踊り方教室」を組み合わせ、九月の「おわら風の盆」では混雑のためになかなか味わってられない情緒と雰囲気を感じとっていただけでなく機会を通年的に創出したものである。

また、雪に埋もれる冬の時期に観光客を呼ぶことができるイベントとして、平成十年から「越中八尾冬浪漫」が始められた。このイベントは毎年二月一日～二十九日まで開催。越中民謡セッション、八尾町の三区の獅子舞が競演する獅子舞競演会、町内各飲食店を会場とする八尾食談義、そして多彩なゲストを招いてのまちづくりシンポジウム等である。

地域共同体的「保存会」が継承してきた「おわら」は、八尾町内で設え実施される多様なイベントとともに通年型の観光資源として、保存会だけでなく観光協会、商工会、行政、そして全国のファンに支えられ、新しい次世代に継承の仕組みができてきている。

平成十五年五月に、行政や各種産業部門が個別に行っていたイベントの連携と緊密

な情報交換を図るため、観光協会が主体となって「八尾町観光イベント連絡協議会」も設立された。そこでは一つひとつのイベントについても、その効果や採算性への意識も生まれ、新たなイベントの創出も期待されるようになるなど、さらなる観光の振興と地域の活性化が期待されている。

こうした取り組みの結果、近年では「おわら風の盆」の観光客数が毎年二五万人程度で安定している一方、平成十年度に三四十万人であった八尾町への通年の入り込み客数も倍増している。

平成十七年四月、八尾町は合併して富山市となった。同年四月、「越中八尾観光協会」が、また同年六月には、「富山県民謡おわら保存会」も法人格の「有限責任中間法人」を取得している。法人化により、「おわら保存会」「おわら風の盆」は商標登録され、公式ガイドブックやポスターやCD、ビデオ等の商品化が相次いでいる。これらは行政補助に頼らない法人運営の原資となることも期待される。

「おわら風の盆」は、これからも地域の主体性を維持しながら次世代に継承されていくだろう。
(みつはし しげあき)

長浜の次世代継承はイベントで実現

——メンバーを増やし、リーダーを育てる

NPO法人まちづくり役場理事

北川 賀寿男

組織の高齢化と次世代継承

まちづくりとは、「みんなで力をあわせてまちを良くしていくこと」。「みんな」とは、住む人と訪れる人、行政と民間、経営者とサラリーマンなど立場も考え方も違う人たちのことである。まちづくりに関わる「市民」が増えることはいいが、集めただけでは烏合の衆になってしまう。それぞれが「力をあわせて」いくこと、すなわち組織化が必要になる。実行委員会や第三セクター、NPO等の設立がこれにあたるだろう。しかし、力をあわせていくには、何をすべきかが明確でないといけない。まちの何が問題で、どうして問題なのか。その解決のためにはどうすればいいのか、何をしなければならぬのか、共有されていないと力をあわせることはできない。

まちづくりには終わりが無い。まちがある限り続いていくものである。しかし、人は歳をとる。組織も構成員の交代がなければどんどん歳をとっていく。いつも同じメンバー、同じ顔ぶれと感じたら、組織の高齢化が始まっている。人も組織も高齢化からは逃れられない。だから、組織の活性化、つまり次世代への継承が必要になる。ところが、これがなかなか難しい。継承とは、「新リーダーの出現と旧リーダーの引退がワンセット」になっているからだ。成功体験があるともっとやっかいな問題になる。過去の成功は、美化され、固定化されているから、その後を受け継ぐものに相当なプレッシャーを与えずにはおかない。過去の成功は、あの時はああった、こうだったというやり方や考え方の硬直化を生み、時代に合わせた新しい行動の足かせとなる。

組織の活性化がうまくいかないとマンネリというジリ貧状態に陥っていく。まるで生活習慣病のように自覚症状のないまま活力が低下していく。次世代継承とは、組織の高齢化による硬直化を回避して、活力をどのようにもたらししていくのかということにはほかならない。

「町衆」のまち長浜

長浜は、秀吉が開いたまちである。秀吉が長浜城主であった時期は一〇年ぐらいなのだが、今でも市民は「太閤さん」と親しみをこめて呼ぶ。豊公園をはじめ豊臣の「豊」の字をとった施設や会社の名前も多い。長浜市は昨年二月に合併したが、合併する前もした後も市章には秀吉の馬印であるひょうたんがあしらってある。

市民が秀吉にこれほどの愛着を持つのは、

秀吉が長浜の城下町を一〇の町に分け、各町の代表者の合議制で城下町を運営させていたということが大きい。秀吉は特区を指定して町屋敷年貢を免除するだけであとは何もしない。町のことはすべて町人がお金を出し合い、解決していく。この特権は江戸時代にも引き継がれ、不動産取引の承認や罪人の逮捕権まで持っていたことが明らかになっている。江戸時代には浜ちりめん、浜蚊帳といった地場産業や琵琶湖の舟運業が盛んとなり、物流の拠点として高い経済力を誇っていた。こうした自治と経済力を

背景に「長浜曳山祭り」に華やかな子ども歌舞伎が取り入れられた。明治時代には、新しい時代に向けて、いち早く学校や銀行が町人の手によって作られ、鉄道駅の誘致が行われ、実現させている。長浜のまちは、市民主導でまちづくりが行われる「町衆」のまちであり、その伝統は今も引き継がれている。

長浜の観光まちづくり

商工業都市として栄えた長浜も昭和三十年代を境に中心市街地の人口が減少し、モータリゼーションの波にも洗われて中心市街地の求心力が著しく低下した。地場産業も衰退

し、かつては「浜行き」と呼ばれて周辺の人々を集めた商店街も、薄暗いアーケードの下でシャッターを閉めた空き店舗が目立ち、見る影もなくなってしまう。

昭和五十年代に、大型ショッピングセンターの建設計画が二件同時に申請されるに及んで中心市街地の危機感は一層に達する。行政、議会、商工会議所、商店街、市民まじえての議論が重ねられ、大規模小売店と中心市街地商店街が共存共栄する道が模索された。そして、大型ショッピングセンター二件のうち一件の建設が承認される一方、魅力ある商店街づくり、お買い物広場・駐車場の設置、文化資源を生かしたまちづくりといった中心市街地の活性化を官民が協力して行っていくことが決まったのである。

その皮切りになったのが昭和五十八年の長浜城歴史博物館の開館と開館記念イベントである長浜出世まつりであった。翌年長浜市は博物館都市構想を発表し、「美しく住む」をコンセプトに独自のミュージアムづくり、個性あるイベントの開催と並んで、オールタウンの再生を重要課題として位置づけた。昭和六十三年には、長浜御坊表参道が整備され、平成元年に市街地の求心

力の核となる黒壁ガラス館がオープン。平成三年には鉄道網が整備され、黒壁の店舗が北国街道沿いに次々にオープンして「黒壁スクエア」と呼ばれる面的な整備が進んで訪れる観光客の数がうなぎのぼりに増えた。平成八年の北近江秀吉博覧会の開催で平成元年に二〇〇万人足らずだった観光入り込み客数が五〇〇万人を突破した。こうして長浜のまちづくりは黒壁の名前とともに中心市街地活性化の成功事例として全国に知られるところとなったのである。

しかし、こうした成功は逆に次世代継承という点では大きな重荷になる。何をするにおいても黒壁の成功が基本となり、そこから離れられない。そのうちに、拡大戦略の負債や美術館という不採算施設の維持管理、さらには客単価の低下の影響もあつて黒壁が赤字経営に陥っていく。黒壁の支援やポスト黒壁の必要性が叫ばれても、なかなか突破口を見いだすことができない。こうなった原因にはいろいろあるが、長浜城ができて二五年、黒壁がオープンして二〇年近くがたち、長浜のまちづくりにおいて組織の高齢化が進んできたことも原因の一つではないかと筆者は感じている。

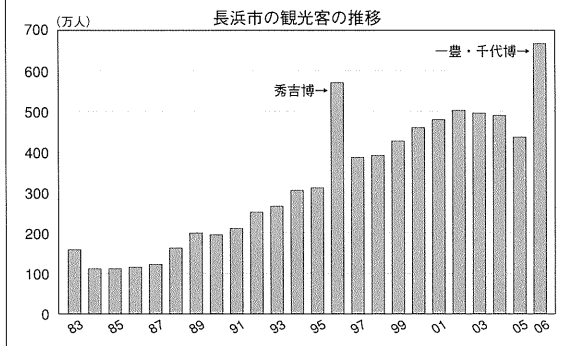
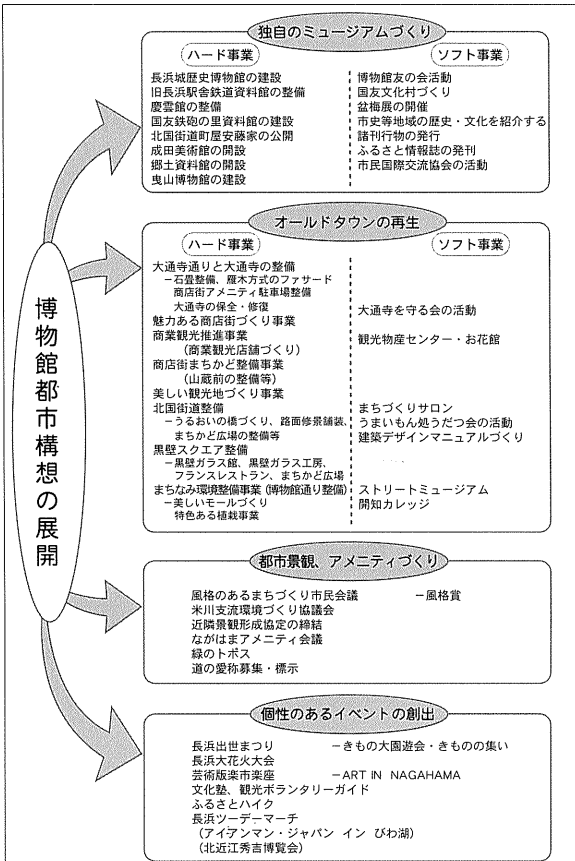
北近江一豊・千代博覧会の開催

二〇〇六年、不思議な縁の巡り合わせが、NHKの大河ドラマが『功名が辻』に決まり、大河ドラマ放映にあわせて、北近江一豊・千代博覧会を長浜で開催することとなった。一豊は三代目の長浜城主であったからである。しかし、長浜は一〇年前にも北近江秀吉博覧会というイベントを開催している。まちの中心にあった廃業した映画館を大河ドラマ館として再生し、長浜城

と大通寺とあわせて博覧会会場として市街地の回遊性を高めた。開催期間二三八日、運営スタッフ四〇〇人、シルバースタッフ一〇〇人、事業規模五億円、期間中の入場者数八二万人、観光入り込み客数が二〇〇万人増加したという伝説的な大イベントである。

しかし、次世代継承という面からみれば、今回の博覧会の方が遙かにダイナミズムがあった。結論をいえば、ハナから次世代育成、世代交代を目的にしたイベントだった

の。今回の博覧会の運営メンバーには前回の秀吉博覧会の運営メンバーはほとんど入っていない。また、前はどちらかといえば長浜市街地に関わりの深い者がメンバーの中心だったが、今回は広域からメンバーが選ばれた。また、年齢も三十代が中心。さらに年の途中で商店街連盟の会長や観光協会の会長になったメンバーもいたのである。私は前回の博覧会でも事務局スタッフであったが、その時には見たこともない若い



人たちが最前線で活躍している姿を見て、次世代継承とはこうゆうことなのかと実感した。前回の主力メンバーの中には、いつ頼ってくるのかと思っていた人もいたそうだが、前売り券の販売からイベントの実施、財政にいたるまで結局一度も頼らずに閉幕を迎えたのである。



さまざまなコト・モノを生んだ北近江一豊・千代博覧会



個性のあるイベント、きもの大園遊会・きもの集い

おわりからはじまるまちづくり

じつは、一〇年前の秀吉博覧会もまた、人づくりを目的としたイベントだった。当時の運営委員長は、「七人のサムライを育てられれば今回のイベントは成功」とまで言っていた。そして、今回の一豊・千代博覧会の運営委員長は、秀吉博覧会の中心スタッフでもあったのである。長浜は、長浜出世まつり（一九八三年）、北近江秀吉博覧会（一九九六年）、北近江一豊・千代博覧会（二〇〇六年）とはほぼ一〇年ごとに大きなイベントを行っている。そして、その一部の主力スタッフが次の運営

トップとなり、連鎖の要となっている。つまり、次世代育成、次世代継承こそが長浜で大きなイベントを行う理由なのである。

しかし、どんな長いイベントでもいつかは終わる。イベントは一過性に終わらせてはならないが、だからといってイベントを続けることが

果たして一過性に対する答えとなっているかは甚だ疑問である。次々と世代交代が行われればいいが、ほとんどは同じメンバーで行われてしまう。マンネリの始まりである。

大切なのは、イベントが終わった後に何を残したかではなく、何が生まれたかなのである。秀吉博覧会では、プラチナプラザ、まちづくり役場、出島塾といった新たなまちづくりの主体が生まれた。一豊・千代博覧会でも、ツアーセンターや紙芝居、そして市民手作りの観光地づくりを目指した組織が生まれようとしている。

新たに生まれた組織に、秀吉博覧会では五

〇〇〇万円、一豊・千代博覧会では三〇〇〇万円というまちづくり資金が市や公共の団体に寄付され、人材を育てる資金として使われていく。これが長浜でいう「おわりからはじまるまちづくり」である。

次世代継承に妙手はない

まちづくりのリーダーは、まちから生まれ、まちが育てるものである。もし「うちのまちにはリーダーがない」というまちがあつたとすれば、それはリーダーがないのではなく、リーダーが生まれるしくみがないだけなのである。

誰がリーダーになるか、受け継いでくれるかは非常に不確実性が高く、体系化することなどできない。次世代継承とはリスクが高いものなのである。長浜では、大きなイベントを開催することで、広くメンバーを集め、長期の事業を通じてリーダーが生まれていくしくみを作り上げて、次世代継承を行っている。要は、多くのメンバーを集め、長期にわたる事業を行えばリーダーが生まれる可能性が高くなるということである。次世代継承に妙手はない。しかし手立てがないわけではないのである。（きたがわ かずお）

次世代へつなぐこころ — 伝統文化の継承を考える

財団法人ポ－ラ伝統文化振興財団

栗田 香穂

伝統文化についての関心が、近年高まりつつある。日本の伝統文化の普及・振興に関する国をあげての取り組みが法律で定められ、平成十三年（二〇〇一）に「文化芸術振興基本法」が施行された。また、^{※1}義務教育のなかで和楽器にふれる体験をさせる試みが義務付けられるなど、日本の地域の伝統文化に関する注目度が増している。こうした動向のもと、ポ－ラ伝統文化振興財団は伝統文化への普及・振興の一翼を担うべく、活動を続けて本年で二七年目を迎える。

^{※2}一九五〇年代後半の高度経済成長に伴う日本の科学技術振興の動きを反映し、多くの科学技術系財団が設立された。その後、一九七〇年代に新しい動きとして脱科学技術系財団が設立され始めたという分析がある。このような時代背景のもと、当財団は昭和五十四年（一九七九）に株式会社ポ－ラ化

粧品本舗の創業五〇周年を記念して設立された。おりしも、社会における財団の新しい意識が芽生え始めた時期に設立された当財団は以後、地道に活動を続け、現在に至っている。

当財団の事業について

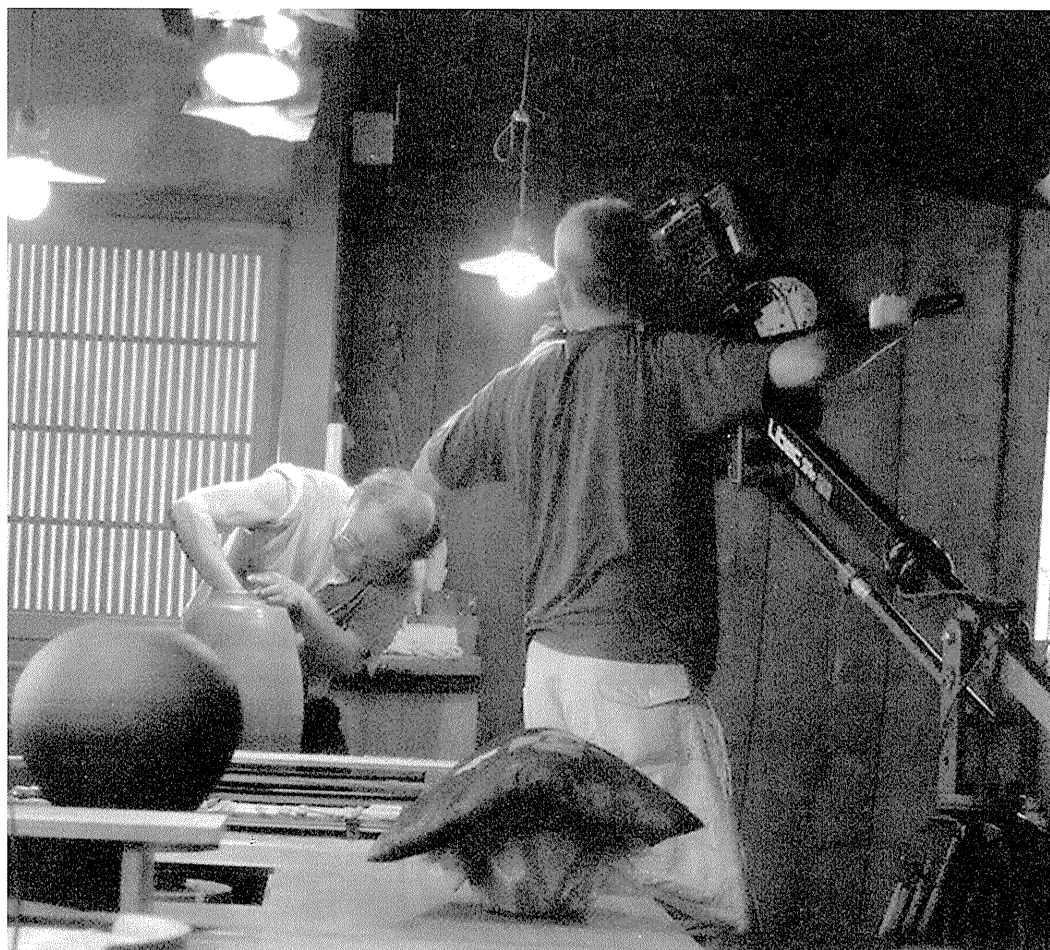
当財団の事業活動は、日本の歴史と風土、自然を背景として育まれてきた伝統文化のなかで伝統工芸、伝統芸能、民俗芸能の各分野に光をあて、微力ながら日本の伝統文化を未来へ継承すべく、現在、五つの事業を展開している。

一・奨励事業 日本 の 貴 重 な 伝 統 文 化 の 発 展 に 貢 献 し、 今 後 も 活 躍 が 期 待 で き る 個 人、 また は 団 体 に 対 し、 さ ら な る 活 躍 と 業 績 の 向 上 を 奨 励 す る こ と を 目 的 と し て 行 う 事 業。 本 奨 励 事 業 を 通 し て、 伝 統 文



第26回伝統文化ポ－ラ賞贈呈式受賞者（平成18年）

二・映像記録作成事業 日本の無形の伝統文化ポ－ラ賞優秀賞をはじめとする各賞の受賞者は、過去二〇〇名以上にのぼる。受賞者は、過去二〇〇名以上にのぼる。



財団最新制作映画「備前焼 伊勢崎淳の挑戦—伝統と革新のはざまで—」

化を映像によって記録。重要無形文化財保持者のわざ、各地に残る民俗芸能など現在までに、四四作品を記録映像化している。

三・普及事業 日本の伝統文化の普及・振興のために各事業を展開。

(一) 伝統文化セミナーの開催 伝統文化の普及・振興のために広く一般に向けて各分野の研究者や技術者を講師として、それぞれの分野の入門編となるような内容のテーマでセミナーを開催している。

(二) 上映会の開催／制作映画VTR貸出 当財団制作映画を中心に、自主上映会を、首都圏を中心に隔月に開催している。また、制作映画をVTR・DVD化（DVDは一部）し、個人、団体への無料貸出を行っている。

(三) 機関誌『伝統と文化』の発行 当財団の年間の活動報告とともに、伝統文化普及・振興のため、月号、取材により設定した特集テーマを届けている。年一回発行し、刊行物は全国の大学図書館、教育委員会、美術館、博物館などへ寄贈。現在、三〇号まで発行。

(四)カルチャーフォーラム 全国の教育委員会、文化団体などと共催し、当財団の制作映画を上映するとともに、講師を招いて伝統文化に関連した講演を行う。

(五)ホームページの公開 当財団の事業活動をホームページで公開、紹介している。

四、助成事業 日本の無形の伝統文化に関連した記録や研究で有効な成果が期待できる事業に対して補助的な助成を実施。

五、作品の収集保存事業 映像記録作成事業で撮影した映画のなかで完成した作品の購入、収集。

以上の五つの事業を柱とし、理事長以下、六名で展開している。これらの仕事を地道に、そして堅実に続けてきた。

現場の声を届ける

さて、こうした事業の取材や調査を通してさまざまな地域に赴き、その土地の伝統文化に携わる人たちと出会い、多くの話を伺ってきた。特に伝統文化ポラ賞の調査、取材や機関誌『伝統と文化』の取材を通して、地域

の伝統文化を支える人たちと接してきた。そのなかには、自らの技術を大学で教えたり、美術館、博物館で講演したり、あるいは地域の学校などで生涯教育の一環として教えたりしている人たちがいた。また、海外で日本の伝統文化のわざを伝えるワークショップを行い、積極的に次世代へ伝える機会を持っている人たちもいた。しかし一方で、多くの地域で耳にしたことはやはり、後継者が不足しているという問題である。

自らが体得し、磨き上げてきたわざに対して誇りを持っているからこそ次世代へ残していきたいと願っている半面、継ぐべき人がいない。生活スタイルの変化に伴う需要の減少が、伝統文化に関する情報を不足させていることに拍車をかけているようである。結果、地域の素晴らしいわざの存在すら知らないという若い人たちが増えていく。さらには、わざを受け継ぐのに必要な原材料や道具をつくる人たちにおいてもまた、後継者

が不足してしまう。すでに不足というだけではすまされず、近い将来、代替品を模索しなければならぬというところまでできてしまっているものもあった。他の地域に、原材料や道具の制作の依頼先のルートを開拓している



機関誌『伝統と文化』27号特集「色鍋島に生命を吹込む筆—有田に伝わる濃み筆を追う」取材より

地域もあった。このまま後継者が育たず、原材料の調達が困難となれば、わざが継承できなくなってしまうという強い危機感を持っている技術者は、少なくなかった。

とかく私たちの目にとまりやすい伝統文化の華やかな部分だけではなく、こうしたなかなか取り上げられることの少ない現場の声のなかに、いま課題となっていることが明確にある。それを当財団の事業活動というフィルターを通して、発信することにより伝統文化をもっと身近なものに感じてもらいたいと考えている。まずは日本の伝統文化のことを広く知ってもらう、そのためにはどのような発信をしていけば良いのか、当財団としても新しい方向性を模索しなければならない。

次世代につなぐところ

このような状況のもと、従来の伝統文化のわざを顕彰していく事業とともに近年、伝統文化の普及・振興のあり方に、特に力を注いできた。日本の伝統文化の保存・継承には、まず知ってもらう、関心を持ってもらうことが重要であると考えたからである。

しかし各地に非常に素晴らしい伝統文化が残っているも前述したような要因で、残

念ながら知らないという若い世代はまだまだ多い。機関誌『伝統と文化』の読者アンケートを見ても、特集で取り上げた内容を讀んでその分野の伝統文化をはじめ知り、とても興味深く思ったという意見をよく目にする。このようなとき、普及・振興の重要性を痛感させられる。漠然と多くの人たちという普及発信の方法では、伝統文化にすでに関心を持っているごく限られた人たち、あるいは限られた世代しか情報をキャッチしてくれないことが多かった。

事業活動を通して今後、私たちが普及・振興していかなければならないのは、限られた人たちだけではなく、もっと幅広い、次世代を担う若い世代をも取り込んだ、幅広い層への発信ではないかと考える。良いものとわかる人たちがわかってくれば良いという考え方ではなく、いままでも存在すら知らなかった人たちへも、知ってもらうきっかけ作りをしたい。いわば伝統文化の世界への入門の一助となるような普及活動をしていきたいと考え、近年その方針を打ち出し、研究を続けている。

伝統文化の素晴らしいわざは、習得する人のみが継承していくものではない。つま

り、わざだけを保存し継承していくだけでは、技術が残っていない。それどころかむしろ、衰退していくであろう。時代とともに、わざを守るだけではなく、さらに育てていくことこそ、継承の真髄なのではないだろうか。わざを育てていくのは、その時代に生きる人たちなのである。需要があるからこそ、わざが磨かれる。であればこそ、わざの素晴らしさを理解し、感じることを育てることが必要なのである。次世代へ継承しなければいけないのは、そうしたところを伝えていくことなのではないだろうか。

当財団の事業活動を通して、いままでもなかなか光があたらなかった伝統文化のわざへも、わずかでも光をあてることができたとしたら、それは大変うれしいことである。そして、その光を受け取ってくれた人たちを、ひとりでも多くしていくことが、今後の当財団の使命であると考えている。

(くりた かほ)

※1..平成十四年(二〇〇二)施行中学校学習指導要領

※2..林雄二郎、山岡義典著『日本の財団とその系譜と展望』より

日中韓三カ国の観光研究機関会議の開催

財団法人日本交通公社研究主幹

岩佐 吉郎

二〇〇六年十二月四日(月)から六日(水)にかけて、日本・中国・韓国の三カ国の観光分野における三つの研究機関(日本・財団法人日本交通公社、中国・社会科学院観光研究センター、韓国・韓国文化観光政策研究院)が一堂に会して、「第一回北東アジア地域において観光協力案模索のための日・中・韓観光フォーラム」が韓国・済州島で開催された。

北東アジア三カ国は、アジアをリードする経済発展を続ける先進国として、日本はすでに海外旅行者数一七〇〇万人を上回り、中国・韓国では海外旅行者数の急激な伸びを示している。国際観光客の送出国である。一方、観光立国宣言を行い、ビジットジャパンキャンペーンによる積極的な誘客プロモーションを展開する日本をはじめ、二〇〇八年の北京オリンピックを控えて受入体制整備の進む中国、「韓流ブーム」で誘客プロモーションに高い成果を

あげる韓国は、国際観光客の誘致にも積極的な取り組みがおこなわれている。一方で、日・中・韓三カ国間相互の観光・交流は、ここ数年でいずれも急激に増加し、活発化している。

国内観光旅行も、中国では、都市への人口集中により帰省旅行が相変わらず高いシェアを占めるものの、富裕層の増大とともに国内観光地の整備も進んでいる。一方、韓国では日本と同様に、地方の経済低迷、人口減少が深刻であり、観光振興による地域活性化が課題となっている。韓国は台湾と状況が似ており、国内旅行が本格的に活発化する前に海外旅行がブーム化していて、台湾の例からすれば、今後「デイスカパー韓国」といった国内旅行見直しの時代が再来すると予想される。

このような状況の中で、三カ国間の観光研究交流では、それぞれの観光事情の相互理解、観光振興の技術・手法の交流、観光事業の共同化

日中韓3カ国の海外旅行者数(アウトバウンド)及び外国人旅行者数(インバウンド)

| | 日本 | | 韓国 | | 中国 | |
|-------|----------|---------|----------|----------|-----------|----------|
| | アウトバウンド | インバウンド | アウトバウンド | インバウンド※1 | アウトバウンド※2 | インバウンド※3 |
| 1999年 | 16,358千人 | 4,438千人 | 4,342千人 | 4,660千人 | 4,110千人 | 8,432千人 |
| 2002年 | 16,523千人 | 5,239千人 | 7,123千人 | 4,753千人 | 6,048千人 | 11,403千人 |
| 2005年 | 17,403千人 | 6,728千人 | 10,078千人 | 6,022千人 | 9,021千人 | 20,255千人 |

※1: 乗務員、海外在住韓国人含む

※2: 香港、マカオ行きを除く

※3: 香港、マカオ、台湾からの旅行者除く

資料: 「日本の国際観光統計」JNTO

日中韓相互の観光・交流の現状

| | 日本-韓国 | | 日本-中国 | | 韓国-中国 | |
|-------|---------|---------|---------|-------|---------|-------|
| | 日本→韓国 | 韓国→日本 | 日本→中国 | 中国→日本 | 韓国→中国 | 中国→韓国 |
| 1999年 | 2,184千人 | 943千人 | 2,386千人 | 295千人 | 992千人 | 317千人 |
| 2002年 | 2,321千人 | 1,272千人 | 2,925千人 | 452千人 | 2,124千人 | 539千人 |
| 2005年 | 2,440千人 | 1,747千人 | 3,390千人 | 653千人 | 3,543千人 | 710千人 |

資料: 「日本の国際観光統計」JNTO

といった取り組みが求められている。

特に、観光が目まぐるしく変化する状況にあるこの三カ国が、それぞれの経験を活かして協力しあうことは極めて有意義である。

すでに財団法人日本交通公社と韓国文化観光政策研究院とは、双方の情報、経験を交流すべく、研究協力関係を結ぶ合意(MOU)を二〇〇五年十二月に締結しており、済州島フォーラムは、その研究協力の一環の活動でもある。昨年七月に北海道阿寒湖温泉で開催された「日中韓三国間の観光交流と協力の強化に関する北海道宣言」を受けて、韓国文化観光部がこのフォーラムの主催者となり、中国から社会科学学院観光研究センターの参加も得て三方国会議に拡大された。

日本からは、国土交通省総合政策局国際観光課からの来賓も含めて、財団法人日本交通公社のスタッフを中心に一五名が参加して、以下の三つのセッションに分かれてそれぞれ三つのテーマについて発表及び討論がおこなわれた。

第一セッション

「観光交流を拡大するための事業別現状及び協力方案」

一・観光交流拡大のための文化・スポーツ

交流

二・観光交流拡大のための観光人材育成(青少年交流)

三・クルーズ観光の拡大に向けて

第二セッション

「観光交流活性化のための分野別協力方案」

一・観光情報面での交流・協力のあり方

二・自治体交流のあり方

三・観光分野での研究協力のあり方

総合セッション

「今後の共同協力方案及びビジョン」

一・連携した観光商品の共同開発協力のあり方

二・観光投資の活性化のための協力のあり方

三・観光共同マーケティング・プロモーションの協力のあり方

各テーマとも、「三カ国が共同して、欧米をはじめとする北東アジア外からの外国人観光客誘致の拡大」と「三カ国間相互の観光・交流の拡大」の二つの視点で、三カ国の観光振興及び発展に向けた積極的な提案がなされた。しかしながら、政府施策に対する提案が多く、三



フォーラムは三つのセッションに分かれて発表及び討論

カ国が足並みをそろえて共同施策をとるためには、それぞれの国における観光政策を調整し、三カ国の共同体制を整備していくことが必要である。そのためには、観光共同協力の必要性を含めたコンセンサスづくりのための研究交流が重要となってくる。さしあたって、これまで観光分野における研究交流の場は少なく、三カ国が直面している観光の現状、発展過程はそれぞれに異なり、まずはそれぞれが置

かれた観光の状況の相互理解から始める必要性を強く感じた。

地方の観光振興による活性化、それぞれの国の観光魅力を高めるための観光資源の保全と活用、人材育成、観光商品開発、観光投資、観光PRなど、それぞれが課題としてかかえるテーマは、三カ国に共通している。こうした共通の課題が確認できたこともこのフォーラムの成果として評価できよう。



済州宣言の調印

最終日には、三カ国の研究機関の合意により、以下の「済州宣言文」が発表された。

一、三国における観光研究の実績と成果を相互に交換して、それぞれの国における観光の現状と課題について、相互の理解を深める。
二、三国研究機関を中心として産官学の関係機関との連携をそれぞれが図り、より成



済州宣言調印後の三カ国の研究機関代表

果のある研究に取り組める体制基盤を構築する。

三、それぞれの研究機関で取り組む研究について、相互技術的な支援、協力をおこなうことにより観光発展を図る。

四、三国研究機関の支援、協力及び共同研究で得られた成果は、幅広く発表して、地域及び日中韓、北東アジアの観光発展に貢献する。

アウトバウンド、インバウンドの国際旅行需要及び国内旅行需要の拡大、活性化、三カ国相互の観光交流促進、魅力ある観光地の整備など今後取り組むべき研究テーマは多岐にわたる。日中韓相互の観光研究交流は、今回のフォーラムを契機によりよく緒についた。どのテーマから取り組むかはこれからであるが、国際観光の供給国として受入国としてこの北東アジア三カ国が注目を集め、観光発展していくために、活発な日中韓観光研究交流を進めていきたい。

なお、この会議を受けて、財団法人日本交通公社と、韓国文化観光政策研究院との間では、MOUに基づき、二〇〇七年一月より両機関は「情報協力」「協力研究」及び「共同研究」に取り組むこととなった。（いわさ よしろう）



連載 I
あの町この町
第20回

大利根のほとり——千葉県・銚子市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト＝著者)

念願の銚子駅に降りたつた。駅前に佇んで振り返り、しみじみとながめていた。駅舎に感動する人もいないとみえて、かたわらを急ぎ足のグループが、わやわやと通り過ぎていく。

平屋建てだが赤つばい屋根が大きく、中二階をいただいたかたちをしている。白い壁、大きなガラスの仕切り。ごく小振りの駅なのに大きく見えるのは、終着駅に対して旅行者のいだく独特の感情のせいかもしれない。千葉から銚子までの地勢はゆるやかな起伏のつらなりで、丘があり、森があり、田畑があった。ただそれだけ。北関東に特有の、なんとなくもの憂げで、寂漠とした風情である。

銚子が近づくと、こころなしか雰囲気が変わった。しかし、これもまた旅行者のひとり合点かもしれないだろう。銚子は単な

る一つの町ではない。たえず地形を考えている。鋭く突き出た岬に加えて、利根川の河口に位置している。ここには満々とした大利根の流れがあり、さらに鹿島灘の白波が走り寄る。

広い通りがまっすぐ河口にのび、新しいビルのあいだにチラホラと古い建物がまじっている。

「あぶら屋 雑貨 小間物 化粧品」

一階は今風だが、二階は大正末年のアーブル・デコのつくり。壁の文字が巧みな装飾性をおびている。通りの左右か、少し入ったところに市役所、郵便局、信用金庫、ホテル、ヒゲタ醤油の本店。途中を右に折れてすすむと、銀行、図書館、NTT、銀行、ヤマサ醤油の本店。逆L字型を一巡して市の幹部クラスに挨拶してまわったくあいだ。

河口に出た。おもわず「海だ」と思った

のは、それだけ川幅が広く、水が盛り上がっていたからだ。あらためて見直すと、やはり川であって、左にまっ赤な利根大橋。どこまでも直線がのびて、対岸の洲崎に消えている。さすがに坂東太郎であって、川の風景としては、わが国に二つとないスケールにちがいない。

法的には銚子と洲崎を含む河口全域が「銚子港」だとか。肉眼ではわからないが、地図には河口の双方からコンクリートの突堤がタコの足のようにのび、一部はタコの頭のように丸まっている。かつては鹿島灘の潮流に大利根から流れこむ水流が、まじりどもえにからみ合って複雑な流れをつくり、船頭たちを悩ませた。陸が目と鼻の先だというのに近づけず、ときには事故を起こした。そんな海域の調整役としてタコの足が登場した。

とりわけ長い足に抱きとられた河口寄りが船だまりで、第一、第二、第三と魚市場がつづいている。ちょうど高知船籍のカツオ漁団が入ったばかりで、第一魚市場はカツオ一色。カツオ、カツオ、カツオ、カツオ……といったぐあいに、広いコンクリートを埋めている。

「海からの贈り物、大切に消費者へ」

事務棟の壁に大人の背丈ほどの字が躍っている。セリが終わったあとらしく、ジャンパーに作業ズボン、長靴というスタイルの人が二〇人ばかり。めいめいジャンパーのポケットに両手を入れ、所在なげにカツオをながめている。カギで引っかけて魚を持ち上げてみる人もいる。累々と横たわる魚のなかに無言の男たちが突っ立っている。魚市場では日常の風景だろうが、旅行者には意味深い黙示録のシーンに立ち会ったかのようだ。

大通りの角地に古風な二階建ての民家があって、瓦屋根の反り、軒のつくり、黒壁が雄壮だ。どこも雨戸で閉ざされていて、連絡先をしるした紙が貼りつけてある。軒の屋号は「磯角」、さぞかし海にかかわりのあった家だろう。

正確にいうと銚子駅は終着駅ではなく、ダンゴ鼻のように出っばった先端を半周するかたちで銚子電鉄が走っている。第一魚市場の



洲崎側から見た利根川

背中にあたるのが仲ノ町駅と観音駅、本銚子駅とあって、まん中を商店街がづらぬいている。以前はこちらが中心街だったのでなからうか。かなりの店はシャッターが下りたまま。全国いたるところで見かける風景である。そんななかで赤さびたパチンコのネオンをいただいたまま、一階の惣菜屋がガンバっている。姉さんかぶりの若い女性がかいがいしく立ち働いている。無言の声援を送るかね合いで、足をとめて見つめていた。

観音駅は坂東二七番の霊場、飯沼山圓福寺への入口である。モッコリとした高台の、さらに高々とした石組みの上にそびえている。正面石段の前に青銅の阿弥陀仏。

「総高三三・五メートル 朱塗り・木(桧)造り 五重塔 平成二十年竣工予定 寄進勸募中」

横手の更地に巨大な看板が立てられている。黒と赤との二色に、完成図とおぼしい朱塗りの五重塔の絵がついていて、いたってハデハデである。

しげしげとながめっていると、うしろから声をかけられた。手水鉢のかたわらのベンチにお年寄りが二人。「立派な塔ができるのですね」というと、そろって首を振って、寄付が思うように集まらないので、そう簡単にはできまいとのこと。

おひとりは半身が不自由らしく、右手は胸にそえたまま。リハビリで毎日境内を歩いていて、もうひとりか介添役。やりとりして、介添役が元川漁師だとわかったので、「しめた」とばかりに質問した。

「バカッピキというのは、どういのですか？」

相手が「おつ」というような顔をした。それから「もう、やるもんはおらんナ」と呟いてから、「バカが引くからバカッピキ」といった意味のことをつけたした。

赤松宗旦の『利根川図志』は江戸時代につくられた利根川百科といったものだが、そのなかに出てくる。

「利根川にて鱧魚を漁するは、毎年七月下旬より十月下旬までなり」

そんな書き出しのくだり。かつては利根川がサケのくる川の南限で、サケ漁も盛んだった。とりわけ布川^{ふかわ}近辺でとれたので「布川サケ」とよばれていた。

「これを漁するには大網・待網^{うまわり}・打切^{うちきり}・歩掛^{がけ}・無相・流し・イクリ・バカッピキ、これらは網なり」

利根川や鬼怒川で行われていた漁法があげてある。かねがね気になっていた。最後にあがっている「バカッピキ」とはどんな漁法なのか。

元川漁師によると、バカッピキには秋バカと春バカがあって、秋バカはサケ、春バカはコイやスズキをとった。網は投網と同じだが、ヤづなにアシワとトメカンがついている点がちがう。トメカンは小舟の先っぽにとめること。ワをつくって足首にひっかけるのがアシワ。

「こうやって、こうだわナ」
ズック靴の足もち上げ、輪をかける手つきをした。右足にかけ、その足を水中につけておく。秋が深まると水の冷たさに足がしびれてくる。

たえず右手のカイで水をかきながら舟を川の流れと直角にしておく。そうしないと網がしぼんでしまうからだ。足にあたりを感じたらトメカンとアシワを落とし、ナワをたぐってしぼっていく。

バカみたいに漁が少ないのでバカッピキ——かどうかはわからないが、何日やつても一匹もとれないことがしょっちゅうで、そのうちやる人がいなくなつたらしい。赤松宗旦のころはそれなりにやる人がいたので、漁法の最後につけたのだろう。

リハビリ中の人が左手で内ポケットをさぐり、名刺を取り出した。もつと知りたいことがあれば、わがもとに連絡せよ。

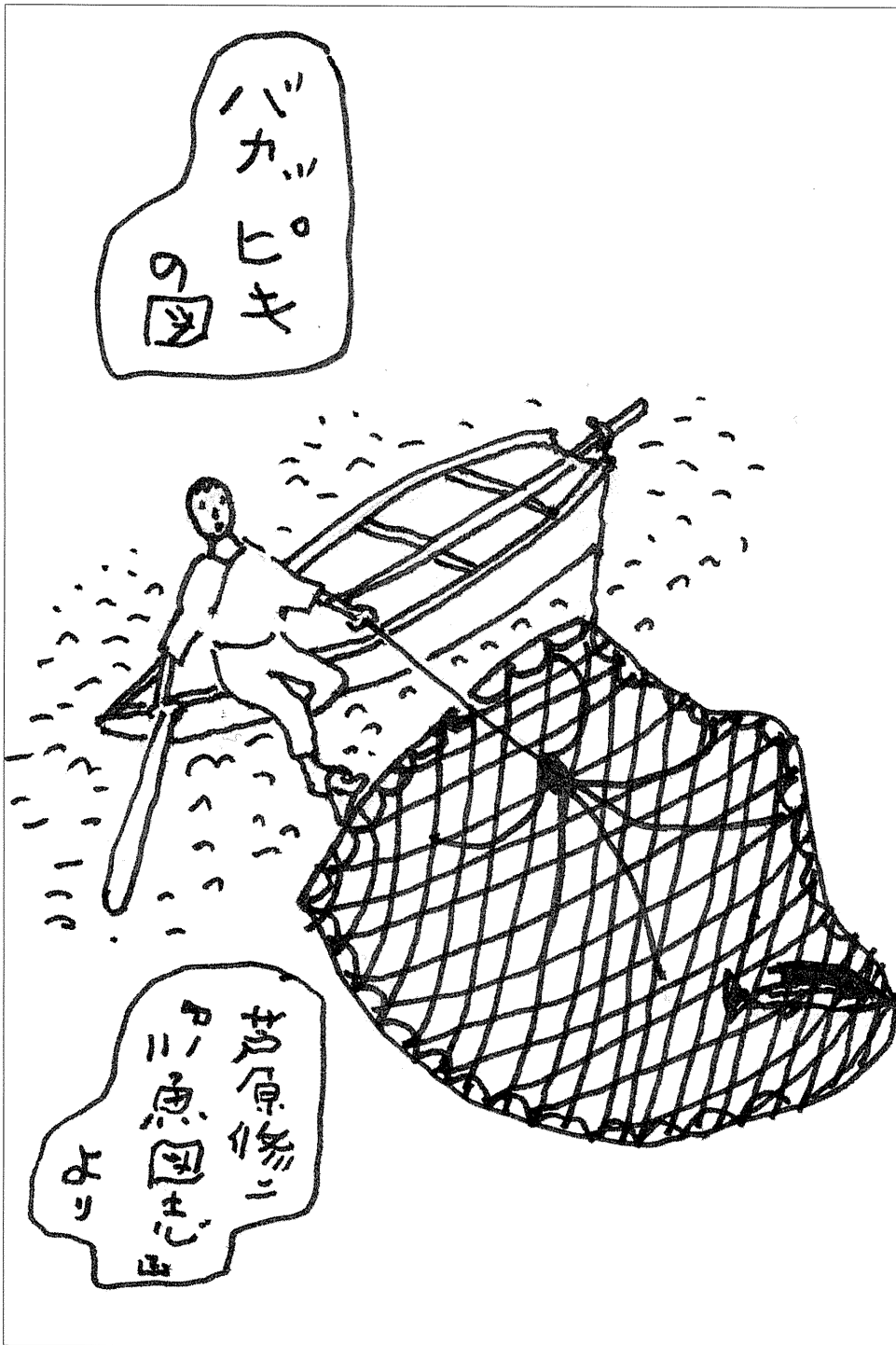
「県北東部一七市町村地域経済活動活性化

化推進委員」

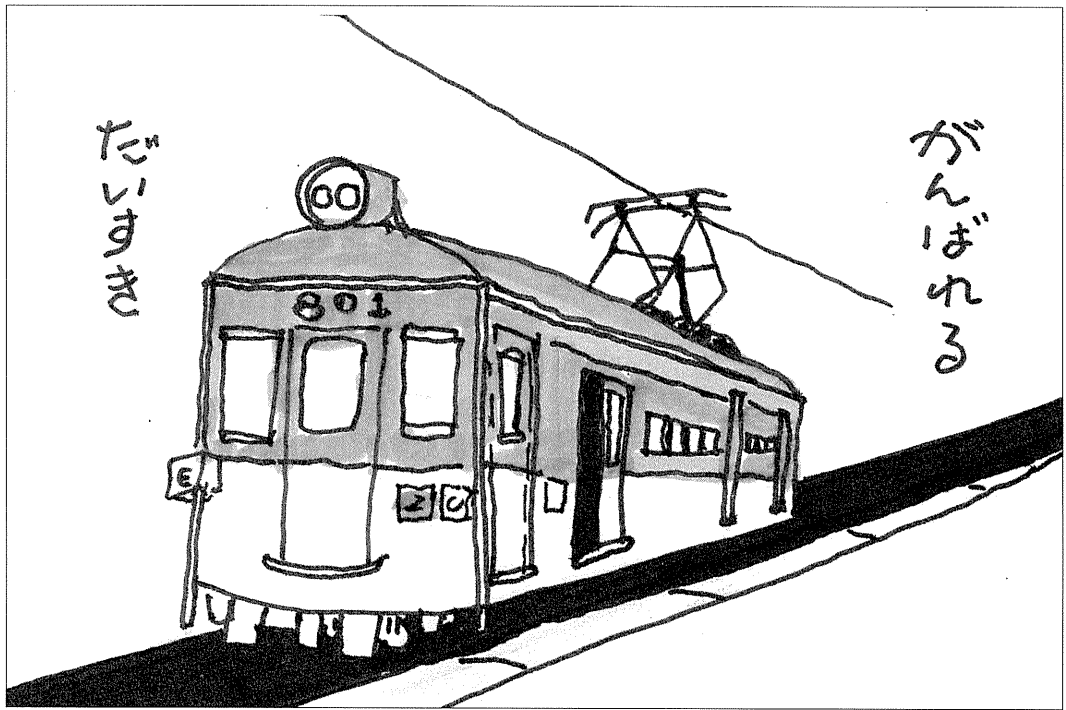
ずいぶん長い名前のお役目を引き受けて

おられる。ほかに銚子市軍恩会会長、銚子信用金庫友の会会友などが並んでいく。名刺

自体が肩書のかたまりのように黒々として
いる。たのまれると断れない性分のもうで、



バカッピキの図



銚子電鉄・スローガンがうれしい

過労↓脳梗塞↓半身マヒ↓リハビリ中という経過があったのではあるまいか。

回復を祈って別れたあと、観音駅から銚子電鉄に乗った。

「だいきすきだから、がんばれる」

これが電鉄会社のスローガンのようだ。モーターゼーションの嵐の中で、古い車両をいたわりいたわりしながら銚子・外川間を往復している。「デハ三〇一」といって鉄道マニアが舌なめずりするような車両がいまも健在だとか。往きちがうときに、手渡しをする信号は手ずれで宝石のように光っていた。

海鹿島駅で降りて、ゆるやかな下り坂を海に向かった。

松林の一角にクジラほどの大きな岩があった。国木田独歩の詩碑がはめこんである。

「なつかしき わが故郷は 何処ぞや」

はじめて知ったのだが、独歩は銚子の生まれ。播州龍野の漁師だった父親が銚子沖で遭難にあい、銚子滞在中に当地の女性と知り合って、そこから独歩が誕生した。放浪好きだった詩人は、いかにもふさわしい出生譚をもっている。

燈台のある大吠埼ではなく、二つ手前の海鹿島で降りたのは、柳田國男のせいである。『利根川図志』の解題のなかに、少年時代のことを述べている。布川の兄に養育されていたとき、弟をさそって夏の盛りに利根川の堤を下ってきた。

「腹がへつてもう歩くのはいやだというのを、あしか島を見せてやるからとすかし励まして、夜路を到頭銚子の浜まで行ってしまった」

それというのも一泊の金がなかったからだ。『利根川図志』は海鹿島のイルカを語っているが、柳田兄弟が訪ねたときは、生きたイルカはいなくて、これがその獣の皮だという毛のハゲた動物があっただけ。二人はその動物にすわり「梅干と砂糖」だけの朝食をとった。民俗学の父の少年時代にふさわしいエピソードというものだ。

ホテルを出て夜の食事先をさがしている
と、カラオケのメロデーが流れてきた。
昔は音痴の人を「犬吠埼」といったとか。銚子のはずれに調子つばずれのシヤレである。そういえば俳人古帳庵の句にある。

ほととぎす銚子は国のとつばづれ

カラオケとは縁のなさそうな魚ひと筋の店を選んで、たのしい夕食にした。あじなめろう、金目なめろう、いわし天ぷら、近海メサバ、銚子名物磯ガキおぼこ焼、海鮮地魚サラダ、海老しんじょう、さんが揚げ、一夜干色々…。

品書きをながめているだけで幸せだ。ときおり肩に「ひ志お入り」とついていて、工夫がこらしてある。「なめろう入り地魚七種いわし天付・板さんおまかせ定食」というのもある。シャッター街のはずれだが、涙ぐましい努力がみのつてか、客の入りがとてもいい。

地魚自慢の店であれば、客のおしゃべりもまず魚談義ではじまる。聞くともなしに聞いていて、いろいろ勉強になった。

「カイギョはやはりカイギョだナ」

謎々のようだが、やりとりがすすんでわかった。スズキやボラは川を上ってくるので川でとれるが、しかし海の魚にちがいはなく、川でとれても海魚は海魚だということ。

川魚は生きていうちに料理しないと味が落ちるが、海魚は一晩冷蔵庫に入れておく。スズキなどは生きたのをサシミにしてもゴキゴキするだけでうまくない。一晩ねかせてから料理すると、ねっとりとして実にうまい。

「なア 板サン、そうだよネ」

板前の權威にかけて、まさにそのとおり。当今は活魚料理と称して、大きなガラス容器に泳がせたのを、これ見よがしにしゃく上げて調理場に運んだりする。そんなパフォーマンスを売りものになっている店があるが、おいしく食べるといふ点でいうと疑問だそう。

川魚はドロくさくてイヤだという人がいるが、料理法の無知からのこと。腹ワタを取り出すと、腹腔のまわりに黒い膜がついている。これがドロくささの元凶だから、包丁の刃先でしごいて、きれいに取ってから煮たり焼いたりすればいい。

「ナルホド、知らなかったなア」

耳学問をおかずに、おいしい地酒をどっさり飲んだ。

ホテルにもどり、寝入る前に地図を開いていると、銚子から利根川沿いに少しさかのぼったところに、「笹川」とある。逆に犬吠埼から九十九里寄りに少しいくと「飯岡」である。ハタと気がついた。笹川の繁

蔵と飯岡の助五郎、「天保水滸伝」の両雄である。

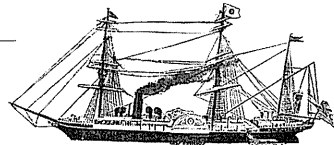
たしか飯岡方が笹川方にケンカをしかけ、とどのつまりは、繁蔵を闇打ちにした。現実はずっと『水滸伝』と縁もゆかりもない、利根川の利権がらみの争いだったのだろうが、民衆はヒーローが好きであって、土地の親分を美しく飾り立てて物語にした。笹川の寺に「天保水滸伝遺品館」というのがあって、ケンカの小道具が見られるらしい。

「平手造酒という助太刀がいたっけ」

助五郎方の殴りこみで、死んだのはこの助太刀ひとりだったというから、巷間に伝わるような腕の立つ浪人ではなかったのだろう。外がへんに明るい。カーテンのすきまからながめたところ、雲が切れて満月にちがいに月がのぞいていた。坂東太郎のほとりであって、気のせいか波音がある。もどり船が鈍いひびきをたてている。河口にそって点々と白銀灯がともっている。

「滄海誰が為に月魂を招く」

岡倉天心の七言絶句、終わりの一行はたしかこうだった。天心はかなりの期間、鹿島灘のかみ手の五浦の海辺に住んでいた。やはりこんなふうには、恐いような蒼い月を見たのだろうか。(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
岩倉使節団
に嵌まって30年
第5回

国内の歴史ツアーと国際交流パーティー

ノンフィクション作家
米欧亜回覧の会代表

泉三郎



横浜、佐倉、那須、大磯へ

岩倉使節の旅に嵌まったお仲間は一〇〇名にふくらみ、海外ツアーだけでなく、国内の歴史ツアーも毎年のように実施することになった。われわれは岩倉使節団だけに關心があるわけではなく幕末維新を起点とする日本の近代史に興味があり、その歴史を学んでいく過程でだんだんその舞台である現地に行ってみたくなるのだった。

まず最初のツアーは、岩倉使節団が出航した横浜だった。開港資料館で当時の資料を見てから港の界隈を散策し、近くのホテルで一泊して懇親を深めた。翌日には、開国当時外国人に遊歩の許されていた行楽地の金沢八景に足をのびた。そこには、伊藤博文や金子堅太郎が缶詰になって明治憲法の草案を練った夏島があり、今も残るその歴史的な旅館の建物も訪ねた。

翌年には、千葉の佐倉を訪ねた。ここは幕末に老中も勤めた開明派の大名堀田正睦の城下であり、蘭学で有名な順天堂の創始者佐藤泰然の屋敷も残っており、当時は

「西の長崎、東の佐倉」といわれて蘭学を中心として名高かった地だ。われわれは堀田家の屋敷を訪ねたり、泰然のご子孫である佐藤強先生にお会いしたり、国立歴史民俗博物館で岩倉使節団についての展示コーナーも見つめた。このツアーには佐倉在住の会員、山田珠子さんの尽力が大きく、地元ボランティアの方々との交流もできた。

その次の年には明治政府の要人の別荘がいくつもある那須へ行った。なかでもお目当ては青木周蔵と松方正義の別荘。青木の別荘は岩倉使節団に随行してドイツに留学し建築家になった松ヶ崎満長の設計であったし、松方の別荘「万歳閣」には五代目当主の松方峰雄氏の格別の配慮で宿泊させてもらう

ことになっていたので。その「万歳閣」では一行三十数名が夕食を囲み遅くまで歓談、雑魚寝をしたのは楽しい経験だった。

さらにその翌年は大磯在住の会員、永富邦雄氏の肝入りで八二名が大挙参加。伊藤博文の居宅だった滄浪閣と吉田茂の邸宅、そして邸内にある「七賢堂」を訪ねた。「七賢堂」は、伊藤博文が維新の元勳として三条、岩倉、木戸、大久保の四人を祀って「四賢堂」としたのが最初で、その後、伊藤自身を加えられて「五賢堂」となり、さらには西園寺公望と吉田茂が加えられ「七賢堂」となった。その日は吉田茂財団の理事長である大久保利泰氏（利通の曾孫）が案内してくださった。



関西、北海道、長州、薩摩へ

その後、関西へも旅した。京都では「坂本龍馬と岩倉具視展」の開催されていた霊山



京都・洛北の岩倉村。岩倉具視幽棲の地にて

歴史館、そして岩倉具忠氏の案内で、二条城、御所、岩倉旧邸をまわった。大阪では緒方洪庵の適塾や大阪城を訪ね、不思議なご縁で西宮神社に移築されている「六英堂」を訪ねた。「六英堂」とは東京の馬場先門にあった岩倉旧邸の一部なのだった。宿泊は、大久保利通が「米欧回覧」から帰国したあと一時静養していた有馬温泉とし、われわれもその湯につかって失意の中にあつた大久保の心中を察した。この旅では豊中在住の会員、山崎岳麿氏が八〇才の高齢にもかかわらず一切の世話役をひきうけ、矍鑠たる

活躍ぶりて一同をいたく感動させた。

また、松前と道南の旅も興趣のつきぬ旅だった。これは会員の松前孝広氏（旧松前藩主二十三世）から「北海道開拓の拠点となった松前藩と日本一の桜をご覧あれ」との強いお誘いがあったからで、会員の石川直義氏が世話役になり実現した。この旅は好天にも恵まれ、二五〇種一万年というみごとな桜花爛漫の饗宴を満喫し、併せて函館、札幌、小樽も訪ね江戸時代の北海道や松前の情況を知ることができ、極めて有意義な旅だった。

そして近年には、岩倉使節団ともつとも関わりの深い長州と薩摩を訪ねた。長州ツアーについては伊藤博文の曾孫にあたる永富邦雄氏が世話役を担当し、二泊三日で下関、萩、山口を訪ね、博文の生地である光市も訪問した。そこでは折しも伊藤公の博物館ができたところで、五代目当主伊藤博雅氏も同行されたために大勢の取材陣に囲まれてにぎやかなことになった。

薩摩は島津家と姻戚関係のある山田哲司氏と小野博正氏や浅生庸子さんが幹事役で、島津尚古館の館長さんや薩摩焼の沈寿官氏から直接お話を聞くことができた。その日は指宿のホテルに泊まって懇親を深め、翌日は密貿易の根拠地だった坊津や特攻隊基地だった知覧も回覧して、当会なら

ではの印象深い歴史ツアーとなった。

国際交流は新年パーティーで

「米欧亜回覧の会」では、毎年新年の懇親会を催すことにしているが、ここでは国別にテーマを決め、在日大使館から大使・公使ら代表を招き、国際交流の実をあげている。使節団が訪問した国は十二カ国あるのでも、フランスを手始めに、英国、米国などと巡り、ドイツ年には銀座のビアホールを会場にミュンヘン気分を催したり、イタリア年の時には、九段にある鳶のからだ古雅なイタリア文化会館を会場に同会館の会員と合同してアリアも聴ける華やかなパーティーになった。

また、スイス年の時には、ジャック・ルベルダン大使が岩倉使節団を訪ねた当時、案内役を務めたシーベル氏のご子孫にあたるこのことで、参加していた岩倉使節団の子孫たちとも一三〇年ぶりに子孫同士が交流をするという和やかな風景もくりひろげられた。

その後、オーストリア、ベルギーと続き、二〇〇七年は、フレデール・スヴェイネデンマーク大使夫妻をお招きし、荻田元駐デンマーク日本大使夫妻も交えて大変楽しい一夜を過ごした。（いずみ さぶろう）



連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り 41

ひとり歩きを始めたスシ

旅行作家

山口 由美

世界に流布する 極北の「日本料理」

「スシは中華料理だよね」

真面目な顔をして、私にそう問いかけてきたのは、南アフリカ・ヨハネスブルグ郊外にある高級リゾートホテルのシェフだった。

「いや、日本料理ですけど」

「えっ？ 本当に？ そうか、それは勉強になったよ。どうもありがとう」

シェフは気の利いたジョークで笑わせようという意図でも何でもなく、さらに真面目な顔をして頷いていた。

農林水産省が二〇〇七年度より「海外日本食レストラン認証制度」の実施を検討しているという。松岡利勝農水相が外遊の際、日本料理とは程遠い「日本料理」を出す店が多いのを憂えたのがきっかけとか。

アメリカでは、これを受けて「日本はスシ・ポリスを世界中に送り込む準備を進めている」と報道した。

だが、冒頭のエピソードが物語るように、スシに代表される日本料理は、もはやスシ・ポリスが追いつけきれないところで、ひとり歩きをしている。

アフリカ・ボツワナのサファリロッジでは、そのシェフが書いた料理本『エレファント・イン・ザ・キッチン（ロツジでは、実際、キッチンに野生動物がしばしば出没するという）』に「オカバンゴ・スシ（オカバンゴとは野生の王国として知られる大湿原）」というレシピが載っていた。

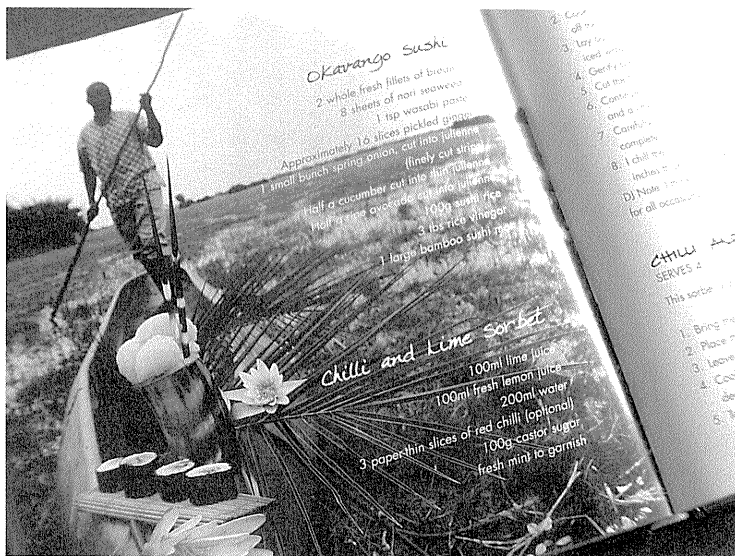
メキシコでは、スシは、なぜか醤油ではなくポン酢をつけて食べる習慣と共に定着しているし、イースター島では、「チャチミ（語源はサシミであろう）」と呼ばれる生の

マグロを千切りキャベツとマヨネーズで食べる料理が、島の食堂の定番メニューになっている。

いまや世界には、松岡農水相が外遊で遭遇したであろう「日本料理」をはるかに超える極北の「日本料理」がいくらかもある。

その昔、海外における日本料理とは、移民の日系人、在留邦人や日本人旅行者の郷愁と共に存在するものだった。面妖な日本料理が存在するとすれば、材料が手に入らないという理由がすべてだった。世代を重ねた日系人は、現地の素材や料理法と多少のコラボレーションもしたが、しかし、日本料理店は、あくまでも日本人か日本人を祖先に持つ者が、同胞を相手に行う商売だったのである。

だが、やがて日本料理はヘルシーだという認識のもと、海外の富裕層や知識階級が



サファリロッジの料理本でも「オカバンゴ・スシ」なるスシが

興味を持つようになる。「スシ・バー」なるものが出現。スシや日本料理は、健康的で高級な食べ物として世界に広まり始めた。二月十八日（日曜日）の朝日新聞「天声人語」によれば、海外の和食店はざっと二万四〇〇〇、うち日本人料理人のいる店は一割というが、日本人以外による日本料理店が増えた背景として、日本料理には高

級イメージがあるので、価格設定を高くできるメリットがあるからという話を聞いたことがある。

さらに昨今の日本文化ブームがある。アニメや漫画と並んで、「クール」なものとしての日本料理が注目されている。旅先で出会ったイタリア人に「日本料理ってどういうイメージ？」と聞いたたら、「ファッショナブル」と即答されたこともある。

リーズナブルな日本料理店が主にアジア人の経営者によって増える一方、これまた世界各地で、流行の先端としての「ファッショナブル」で「クール」な日本料理レストランが増えている。

その現状は、たぶんイタリア料理の状況に似ているのではない。ピザやパスタが、オリジナルを離れてインターナショナルな料理として世界に定着する一方、イタリアンは、お洒落な料理としても評価が高い。

「ファッショナブル」で「クール」とされる日本料理に、お役所の認定制度はいささかなじまないが、フランスのミシュランのような格付け制度であれば、世界に日

本料理の存在感を示す意味があるのではないか。すなわち、その格付けをもらうのが、「クール」である証のような制度である。

一方で、スシや日本料理に注目しているのは、いまや先進国だけではない状況にも注目すべきだろう。

私は、以前、パプアニューギニアで、もの凄い「スキヤキ」に遭遇したことがある。厚切りの赤身の牛肉をニンジンとブロッコリーと玉ネギを入れて醤油で煮る。私は「スキヤキには砂糖を入れない」と注意した。

聞けば、ホテルに設けられたその日本料理レストランは、かの地に赴任した青年海外協力隊の観光隊員が任務の一環で開業したのだという。観光隊員とは、こういう仕事もするのだ。しかし、肝心の料理人は、なんとフィジーで修業したらしい。日本料理でフィジーはないだろう、なぜ日本に行かなかったのかと聞くと、お役所の取り決めで、研修は周辺諸国にしか派遣できないからという。

どうせ国のお金を使うのならば、こういう技術援助にこそ使ったほうが、よほど極北の「日本料理」が世界に流布するのを防げるのに、残念なことである。

(やまぐち ゆみ)

旅の図書館
新着図書紹介

ドロシー・ギルマン著の「ミセス・ポリファックス・シリーズ」にのめり込んだ時期があった。どこにでもいそうなアメリカの元氣印のおぼちゃだが、ふとしたキツカケでC・Aのスパイになり、世界各地を飛び回って大活躍。そんな話である。筋だての面白さと、登場人物のキャラクターも魅力だったが、スパイとして潜入した国・地域の深みのある描写について引き寄せられた。それは画像を超越した「言葉による風景の創造」だった。

文学作品には、家庭や恋愛など人間関係を中心に描いた人生論的な作品と、人間から少し離れて人々の日常を取り巻く風景・場所を見ようとする風景論的な作品がある。現代のすぐれた小説には、風景のもつ力に注目し、言葉によって風景を立ち上げようとする作品が多いらしい。

今回紹介する『言葉のなかに風景が立ち上がる』(川本三郎著、新潮社)は、物語が生まれる場所・空間、つまり風景という視点から文学作品を読み込んだ本である。町あるきの達人でもある著者はいう。「人間ばかり、現実ばかりの作品は息が詰まる。といって、はじめから遠い宇宙の果てや空想の異界を舞台にした極彩色のファンタジーにも心が動かない」「現実と非現実、こちらと向こう、人間の手が加えられた風景と加えら

れていない風景のあいだの“中間の風景”。いわばリアリズムとファンタジーのあいだの作品が好きなのだ」

文学作品を読み込むための視点は風景であって、見るものを圧倒させるような景色ではない。「日常に近い、人の営みが感じられる目の前に広がる普通の眺め」なのだ。

本書が取りあげた作品は、野呂邦暢の『鳥たちの河口』など二十二作。各作品には文学上の共通性はなく、その舞台も都市近郊のニュータウン、場所が特定されている町・特定されていない町・特定しなくても推察できる町、なかには宮崎駿アニメ『魔女の宅急便』の海辺の町のような架空の町までさまざま。共通点があるとすれば、平穏な風景が広がる町(街)。

読み解かれた各作品には、著者が立ち上げた風景が標題として入る。この標題がまた絶妙で、実際に挿絵が入ることもある。ちなみに表紙の挿絵は、佐伯一麦の大佛次郎賞受賞作品『鉄塔家族』。標題は「丘の上の静かな暮らし」。

例を一つ。作品は直木賞作家・重松清の『定年ゴジラ』。舞台は、ニューと謳ったがため余計にはころびが目立ちはじめた東京郊外のニュータウン「くぬぎ台(架空)」。サラリーマン時代には、帰ってきたときにけばけばしい看板がな

いからホツとしていたが、定年後は面白味のない街と感じる主人公。隣人の一人は「真面目一本槍に育ててきた息子が、気づいてみたら、なんの面白味もない男に育ったようなもんだわな」と街を評する。隣人には、街を開発した私鉄を定年退職した人物も。「当時皆さんが、さまざまな開発に反対したからこんな結果に」と。あげくの果てに若い社会学者には、自慢の雑壇の家が街づくりの思想に高齢者のケアがまったく織り込まれていないと批判される始末。いずれは、墓地のニュータウン探しか……。問題は多いが、『定年ゴジラ』は親しみを込めてわが街を描いている。結果、著者は標題『わが街、ニュータウン』という風景を立ち上げる。

風景に着目することで、読者にとって作品は身近なものになる。親しみもわく。本書は紛れもなく、文学風景論のすすめである。(中村 功)



四六判 239ページ
 定価 1,785円
 新潮社

財団法人 日本交通公社 出版物のご案内

■定期刊行物

- 旅行年報（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。
- 旅行の見通し（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的变化。
- 旅行者動向（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。二〇〇六では、「団塊ジュニア」「リピーター」「温泉ニーズ」を特集。
- 観光文化（年六回、奇数月二〇日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関誌。

■観光読本（二〇〇四年六月発行）

東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から一〇年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■その他刊行物

- 美しき日本
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三九一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）「Beautiful Japan」も発行。
 - エコツアーリズム さあ、はじめよう！
エコツアーリズムを目指すすべての人に向けて環境省が編集し、当財団が発行した手引き書。
 - 実践講座インタープリテーション
インタープリター（自然ガイド）実践者のための参考書。
 - 自然ガイドのためのおもしろヒントブック
自然ガイドツアー・プログラム作りのための素材集。
- ※刊行物に関する問合せ、冊子をお求めになりたい方は
財団法人日本交通公社 観光文化事業部まで。
電話：〇三・五二〇八・四七〇四 <http://www.jibor.jp>

次号予告

平成の御世になってすでに一九年。今春には平成生まれの大学生も誕生します。次号の特集は「昭和」。改めて昭和という時代を振り返ってみます。

編集室から

●本誌の「風致探訪」をご寄稿いただいている樋口健二さんをお招きして二月三日（土）に第二回「旅の図書館」講座を開催しました。テーマは「富士の四季を撮る」。樋口さんが講師をされている日本写真芸術専門学校、日本ジャーナリスト専門学校、両校の学生さんをはじめとして二六名の方が参加され、熱心に講演に耳を傾けられました。

●樋口さんはフォトジャーナリストとして日本の高度経済成長の陰の部分である公害や原発問題を直視してきただけに、美しい自然・景観や歴史的町並みの素晴らしさや尊さを人一倍希求され、その思いを熱く訴えられました。写真技術よりむしろ風景と向き合う心情を吐露され、旅の感動を映像に残す写真の大切さを強調されました。樋口さん自身、生まれ故郷から見る富士山を眺めて若き頃画家を目指したとのことですが、今日に至るまで時に癒され時に勇気づけられたに違いありません。

●文化遺産として富士山を世界遺産に登録する動きが活気づいてきましたが、日本人にとつて霊峰富士は信仰の山であり、心のふるさとです。樋口さんにご披露いただいた数多くの気高い富士の姿をご覧いただいて、富士を想ふ縁としていただけたら幸いです。（U・T）

編集後記

◆地域の伝統や文化、歴史的景観・町並みあるいは地域の遺産子を如何に次の世代に伝えて行くべきか。地域を支えてきた諸々の環境や条件が激変している状況下、困難な課題ではあります。しかしながら、均一化の波に抗して地域のアイデンティティを確立し絆を維持していくためには、今こそ地域に根付いてきた伝統を守り伝えてゆくことが大切との認識が深まってきました。後継者の育成は如何に図られるべきか、伝統の維持と地域の振興を関連づけるにはどうすべきか、企業の支援は如何にあるべきかなど今号では特集しました。

◆岡崎先生が指摘された国が保全措置を講じている建造物の数を人口比でみた英米との落差には衝撃を受けます。経済最優先で突き進んだ戦後日本の姿そのものと言わざるを得ません。歴史的建物・町並みなど現代のニーズに合わせて再生し活用を図る知恵と汗が一層求められています。

◆小説、テレビ、歌謡曲の舞台ともなり圧倒的な人気を誇る「おわら風の盆」。その優美な踊りと哀調を奏でる三味線、胡弓の音は人を引きつけてやみません。多くの芸能文化人との交流により磨かれた由まさに文化振興の王道です。伝統文化・産業に現代の息吹を吹き込んで次の世代に継承することは永遠の課題です。（宇八）



観光文化 第182号

第31巻2号通巻第182号

発行日 2007年3月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内1-8-2
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051
<http://library.jtb.or.jp>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554